

2010 年度

2011 年 3 月 19 日(土) 14:00~

北海道大学・人文社会科学総合教育研究棟（通称 W 棟）W408 室（W 棟は文学部棟に隣接した 6 階建ての棟です。文学部棟までのアクセスは下記 URL を参照）

<http://www.let.hokudai.ac.jp/let-common/access.php>

山田 大輔（北海道大学・院）

上古漢語指示詞の体系—「此」「是」「彼」を中心に—

発表者は、昨年の第 60 回全国大会において、非現場指示における「此」「是」は「局限・非局限」の対立を成している、ということを主張した。それをふまえ、本発表では、この「局限・非局限」が現場指示における「近指・中指」という対立とどのように関係するのかを考察する。同時に、いわゆる遠指系の指示詞「彼」の指示機能についても検討し、最終的に、上古漢語において「此」「是」「彼」がどのような体系を成していたのかについて一つの仮説を提示する。

成田廣子（北海道大学・院）

『拍案驚奇』における“V 得”と“V 了”について

近代漢語における“V 得”構造は、現代漢語の状態補語・可能補語などとの関連からも興味深い研究対象である。本発表は、明末の白話小説『拍案驚奇』を資料として、①“V 得”構造の種々の機能を分析・記述し、②またそのうち動作の実現・完了を表すものと、類似の文法的意味を表す“V 得”との使い分け条件について検討するものである。後者については、まず“V 得”と“V 了”の V の種類に着目しつつ、語彙的アスペクトの観点から分析を加えることを試みる。

林恒立（北海道大学・院）

閩南語の「來去 (lāi khi)」のモダリティ用法— 北京語、日本語との対照を交えつつ—

北京語と同様、閩南語の“來”（来る）は、本動詞の用法だけでなく、「我“來”試看 mai」（私がやってみる）のように、動作主の後ろに置かれ、動作に対する積極性を表す用法を持つ。さらに閩南語には、上述の「動作主+來+VP」の他、「動作主+來去+VP」という用法が存在する。例えば「咱來去 chhi-thô」（遊びに行こう）の場合、a) [咱 [來] [去] [chhi-thô]] や b) [咱 [來] [去 chhi-thô]] と捉えることもできれば、c) [咱 [來去] [chhi-thô]] と捉えることもできる。本発表では「來去」を c) のように一纏まりで話者の意志を表すモダリティ要素と見なし、その用法について文タイプと関連付けながら分析する。

飯田真紀（北海道大学）

広東語の動態助詞“-到”と否定詞

広東語の動態助詞“-到”は、事象の存在・非存在を表す助動詞(副詞)“有/冇”と共起する場合のみ現れるが、先行研究では“-到”の意味機能は十分に明らかにされていない。本発表

では、“-到”は動作・状態の「未実現から実現に至る変化」を明示する機能を担うものであり、“有 V 到”、“冇 V 到”、“有冇 V 到”は動作・状態の実現という<変化>に焦点を当てた表現形式であると考え。その上で、“-到”が“有/冇”と共起するときのみ現れるのは、“有/冇”自体が動作・状態実現という<変化>に言及することができないことに起因しており、その点で広東語の否定詞“冇”と普通話の否定副詞“没”は大きく異なることを述べる。

問い合わせ先

〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目

北海道大学大学院文学研究科 松江崇研究室（支部事務局）

E-mail: zhongwenxi *let.hokudai.ac.jp（*を半角@に変えて入力してください）